

西欧化とイスラーム

長場 紘

東西文明の十字路、東洋と西洋の分岐点、かつては世界最大、最強であったオスマン帝国を受け継いだ国、政治と宗教を分離して近代的、西欧的な国家を造りあげた国、ムスリム（イスラーム教徒）が総人口のおよそ九五%を占めるが「ヨーロッパの一国」になりたいと欲している国、そして、アジアやアラブ諸国とも連携を強めている国、このような地理的位置と錯綜した歴史的背景をもつ現代のトルコはこんな風に形容されるだろう。

オスマン帝国時代の昔から多くの異なる民族と宗教が数百年にわたってアナトリア（小アジア）ともいう。トルコ語ではアナドル）を舞台に去来し、その間に血縁融合がはかられて現代のトルコ人が形成された。したがって、典型的なトルコ人の容貌や容姿を問われてもすぐには返答に窮してしまふ。一見して西欧人と全く変わらぬ緑眼、碧眼、金髪をしたトルコ人も、とくに都会では、多数見かけられ、その一方、日本人と同じような体つき、黒髪、黒眼のトルコ人も決して少なく

ない。こうした多様性は服装にも如実にあてはまる。

トルコは貧富の差が大きい国であるが、トルコ人はおしなべて見栄っぱり、おしゃれ好き、高級品嗜好という性質をもつていて、日常着、よそゆき着、通勤着、作業着などの区別も都会では比較的是つきりしてゐる。女性に限れば、自分自身を徹底的に着飾る“執着心が、とりわけ強いように思われる。これは、けばけばしい化粧、マニキュア、マスカラ、サンングラスの多用、スーツのデザインや配色の大胆さなどから十分にうかがえる。

伝統の欠如と西欧化

トルコ人の服装を考える際、二つの特徴が観察される。第一の特徴は、伝統的な民族衣装がないことである。トルコではすでに十九世紀の中頃からロップバ遠征を重ねるうちに、ヨーロッパの人々の服装から受けた影響に起因するかもしれない。だが、女性は家の中では洋服であっても、外出時には宗教的な理由からチャルシャフ（顔を隠して頭部からつまさきまで身体全体を覆う黒布）を身につける社会的規制がはたらいていた。他方、男性は家の内外に限らずワイシャツ、ジャケット、ズボン姿が一般的なスタイルとなった。

一九二三年に誕生したトルコは近代化、西欧化政策の一環として二五年十一月二十五日にトルコ人男性の国民帽といわれ、礼拝に適したフェス（フェルト製でひさしがなく鉢をふせた形の赤紫色の帽子）の着用禁止の法律を制定した。フェスにかわってシャプカ（ひさしのある西洋帽）の使用が奨励されたが、敬虔なムスリムの間から激越な反対運動が盛り上がった。しかし、女性のチ

シャルシャフとテュルバン（髪の毛を露出させないで頭部全体を被う布）の着用禁止までは強行できなかった（ただし、政府機関や大学などで働く国家公務員はシャルシャフとテュルバンの着用は認められなかった）。シャルシャフとテュルバンは、かつてはイスタンブルにおけるファッションであり、強いていえばこれが女性の伝統的な衣装であった、といえるかもしれない。

第二の特徴は、成年の男女を問わずどんな衣装をしているかによってその人の出自、社会的階層と社会的地位、貧富、帰属集団、イスラームへの傾斜度などをほぼ間違いないで推察できることである。トルコは日本の二倍近い面積をもつ広い国であり、その上、経済・社会開発が進んでいる中、西部地方と遅れている東南部地方、沿岸部と内陸部、都市と農村、自然環境などの違いによりトルコ人の服装には若干の多様性が観察される。しかし、男性はジャケット（あるいはジャンパー）、ワイシャツ、ズボン姿、女性はブラウス、スカート姿が日常着の基本的な型であろう。最近では、ヨーロッパの影響をうけて若い男女の間ではジーンズの人気が高まり、しだいに定着しつつある。子供のそれは日本や欧米諸国とほとんど同じといえる。

エリート層の服装

イスタンブル、アンカラ、イズミルといった都会の通りで眼にするのは大部分が洋服姿の男性、女性である。しかし、仔細に観察すると素材や意匠の違い、色彩感覚、地方出身者と都市出身者の違い、世代による習慣の違いなどが手にとるようになる。エリート層に属し官庁、大企業、銀行などに勤める高学歴で比較的高い地位にいる役員、あるいは大学教授、医師、弁護士、エンジニアなど専門知識人は、上下揃いのスーツに

ネクタイを締め、アタッシェケースを手にして通勤する姿が印象的である。彼らは日本のビジネスマンよりも上手に着こなし、スーツの色彩や柄も豊かでけつして画一的ではない。同様に、エリートと云われるキャリアアウーマンも最新流行のスーツやドレスをシックに着こなし、高いヒールの靴を履き、高級ブランドの装身具を身につけてさつそうと歩いている。こうした人々は、ほとんどが高級住宅街に住み、外国車を所有し、地中海やエーゲ海岸沿いに所有する別荘で長い夏休みを過ごし、イスタンブルであれば高級紳士・婦人ファッション、子供服、装飾品などを扱うブティックが軒をならべるイステイクル通り、ルーメリ通りあるいはバグダット通りでショッピングを楽しむ、また時には外国旅行に出かける、といった上流階級に属するほんの一握りにすぎない。

庶民の服装

他方、エリート層とはいえない一般社員や労働者、靴みがき、街頭で焼栗やとうもろこしを売る人々などの服装からは豊かな生活の匂いを嗅ぎ取ることは難しい。男性のジャケットやズボンの色彩は一樣にくすんでいて、清潔な感じはしない。だが、ほころびや穴のあいた服、くたくたに使いふるした服を着ている人は意外と少ない。外国人やある程度の生活水準以上の家庭では必ずといっていいほどヒズメッチ（家政婦）を雇う習慣がある。ヒズメッチの多くは地方出身者であり、何年にもわたって都市生活をおくつても服装に關しては都市化することなく、頑迷なまでに保守的である。家の中でも仕事をする時でも、彼女たちはイエメニという白い布を頭から肩あたりまでたらし、色、柄が異なるブラウスを何枚も重



エディルネ近郊農家の母娘

ね着し、シャウワル（日本のモンペに近く、ゆったりとしていて、くるぶしの所で縛る）をつけ、その上にスカートをはく、これは一年を通じて変わることはない。このスタイルは、農村で働く女性の伝統的な服装にほかならない。

地方の人々

地方に住む人々の服装は、都市における男女の姿と大差ないが、日常着と作業着の区別はあまりなされていない。上の写真はブルガリア国境に近い都市エディルネ近郊の農村のある農家の庭先で写した母娘である。母娘ともブラウス姿で、シャウワルをはいている。男性が農作業や建設、道路工事などをする時にはくズボンやポテウルといい、シャウワルとほぼ同じような形をしている。母親が被っているイエメニは、テウルバンともスカーフ（トルコ語でバシユ・オルテユスユといい、頭を被うものという意味）とも異なる。イエメニは暑い陽差しを避けるために

被るのであって、イスラームとは関係なく、トルコ全土で普遍的に見られる働く女性の被りものである。なお、母親が右手に持っているものは庭にあるかまどで焼きあげる前のパンである（蛇足ながら、約一時間ほどで出来上がったこのパンのおいしさは未だに忘れられない）。

イスラームと服装

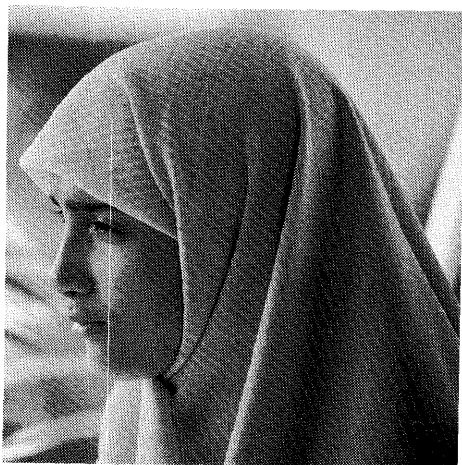
最後に、近年におけるイスラームの復興現象と服装との関係に触れないわけにはゆかないだろう。一九八〇年代に入って、イスラーム化が急速に進む中でイスラームの規範に則ってチャルシヤフやテュルバンをまとう女性の数は着実に増加するようになった。八七年四月、イズミルにある九月九日大学でイスラーム原理主義またはイスラーム過激派を標榜する一部の女子大生からテュルバンを被って授業に出ることを認めよ、という要求が出され、学長室の建物の前で座り込みが行われた。その後、同じような要求が全国のほとんどの大学から持ち上がった。当初、教育省や高等教育委員会（YOK）は断固反対の立場を繰り返し主張していた。しかし、この問題は首相や大統領までも巻き込み国内世論を二分する憲法論議にまで発展し、政府は五月末になってようやくそれを容認する決定を下した。教育省は、女子大生が被っているのはテュルバンではなくスカーフであり、一つのファッションにすぎない、と解釈したのである。また、二年ほど前にイスタンブルの下町にファッショナブルなイスラーム的衣装（トルコ語でテセツテュル・モダという）を売る店が出現、老若男女が頻繁に出入りし、結構繁盛しているらしい。

他方、高等教育を身につけ西欧との接触の経験がある上流階級の人々や若者の間には「イスラ

ームの伝統や文化に拘泥している」ことを恥とする風潮がみられることも事実である。女性が「反動の象徴」とみられかねないチャルシャフをまとうことは、イスラームを通じて自己の地域的、社会的立場を顕現しムスリムとしてのアイデンティティを確立する主張の表現形態にほかならない。だが、社会状況からみてチャルシャフを身につけることにためらいを感じる女性は、せめてテュルバンでも被って信仰心が篤いムスリムであることを示したいと欲することになる。イスタンブルなどの都会で見られるチャルシャフ姿の女性は、保守的な東南部の出身者に多く、一般的に下層階級に属し、その上相対的に両親の教育水準は高くない。洋服姿が圧倒的な都会ではチャルシャフ姿やテュルバンは特異な存在として注目され



チャルシャフ姿の女性



これが最新の流行（テュルバンを被る女性）

やすく、とくに、夏にはチャルシャフ姿とシヨルト（シヨートパンツ）姿の対照的な光景を眼にすることができ。前頁の写真は人口六〇万に達する西部にある大都市ブルサのとある公園のベンチで見かけたチャルシャフを身につけた女性である。歳の頃は三十代前半だろうか。何故かチャルシャフ姿の女性は美人に見えるから不思議だ。反対に、地方では想像されるほどチャルシャフ姿の女性にお目にかかれる機会は少ない。このように、チャルシャフやテュルバンはイスラームと関連づけて説明されやすいが、むしろ、問題の核心は経済的貧困に対する政治体制、経済政策への不満が込められている、と理解すべきであろう。

女性がテュルバンを被るのは、スカーフと同じく一種の流行であり、またおしやれの意味も込められている。右の写真はイスタンブルのヨーロッパ側とアジア側をひっきりなしに往き来する連絡船の中で写したものである。彼女は値がはる絹製で格子模様の最新流行のテュルバンを被っている。これが先に触れたテセツテュル・モダである。十代後半と思われる若い女性らしくなか

なかおしやれである。みだりに他人に肌や髪の毛を見せないことがイスラームの伝統であり、二つの写真の女性たちはともに敬虔なムスリムであることを顕示している。ところで、男性がシャブカを被っている姿を都会でも地方でも見ることは最近ではめつたにない。地方に行くと中年以上のほとんどの男性は、ひさしが少ししか出ていないカスケット（鳥打帽子）を愛用している。敬虔なムスリムは、ジャーミイ（モスク）へ礼拝に行く時には柄模様を織り込んだフェスに似たタッケという特別な帽子を被る男性もいる。

服装のイスラーム化が今後いつそう拡大する方向にあるのか、あるいは一時的な現象にすぎないのかは判断がつかかねる。もし、イスラームの復活を願う人々からイスラーム的服装の強制あるいは法律でそれを明記する要求が出されるようであれば、政教分離を国是とするトルコにとつて脅威であり、またデモクラシーへの挑戦でもある。しかし、近い将来こうした要求が出されるとはとうてい考えられない。

（ながば ひろし／アジア経済研究所国際交流室次長）